

六甲山から望む市街地

第22回テーマ： 都市環境と六甲山

講演内容

- ①都市と自然から見る六甲山
- ②郊外居住と自然から見る六甲山
- ③地球環境時代から見る六甲山

実施日：平成17年1月15日（土）
午後1時～3時30分

場 所：六甲山YMCA
里見ホール



講師：澤木 昌典さん

プロフィール

1957年生まれ。1982年大阪大学大学院工学研究科環境工学専攻博士前期課程修了。1992年兵庫県立人と自然の博物館研究員・兵庫県立大学助手。2004年9月大阪大学大学院教授。

瞬く間に銀世界になった

この日の六甲山には、大晦日に降った雪がまだ残っていました。記念碑台周辺の散策路には10センチくらいの霜柱やつららなど、市街地では見られない光景を目に、冬本番を実感しました。

23名の熱心な参加者が里見ホールに集まりました。今や恒例となった暖炉で焼いた焼き芋を片手に、ざくばらんにお話を聴きました。講演が始まるにしたがい雪がどんどん降り積もり、マイカーで参加された2名の方は、下山が危険なので途中で帰られました。



どンドン降り積もる雪

地震の積み重ねでつくられた六甲山地

澤木さんは、都市環境デザイン学がご専門で、都市計画やまちづくりなどを研究されています。今回は、都市から六甲山を見つめるという切り口でお話いただきました。今年は阪神大震災10周年で、澤木さんが撮影されたスライドを見ながら震災の様子を振り返りました。神戸にはたくさん活断層がある、六甲山は100万年以上をかけて地殻変動を繰り返し、形成された山であるとの解説に、大自然の脅威を痛感しました。

主催：六甲山自然保護センターを活用する会

後援：兵庫県神戸県民局 兵庫県立人と自然の博物館
灘区役所 神戸市教育委員会

恵まれた環境を持つ阪神間の居住地

阪神間は瀬戸内海に面し、六甲山の南斜面に位置する郊外居住地の先進地域です。明治半ば以降、快適な環境を求めて都市から郊外へと人が集まり、郊外化の進行と同時に様々な環境問題も発生してきました。

コンパクトタウンを目指す神戸

コンパクトな生活圏の集まりで市街地を構成し、周囲に自然環境を保全していく形が神戸のあり方と澤木さんは話されました。澤木さんからの冷静な投げかけには、地球環境から見つめる100万年のあり方、私たちのあり方について啓示を受けた1日でした。

※詳しくは、1. 2ページをお読みください。

参加の感想 田中 有司さん

山の鼓動、木々の息づきを感じずような静寂の中、凍てついた山の小道を歩いたとき、遠い子どもの頃のことを思い出しました。

一方教室では、澤木先生の話を一言も聞き漏らしたくないと伺い、皆さんの熱心な様子、好を同じくする人達の集いの素晴らしさに感激しました。

そして、しんしんと降る雪、ほかほか焼きいも、暖炉で燃える薪の香がこの一日の新しい記憶として残っています。

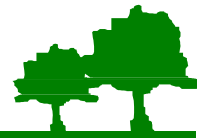


【助成金をいただいている機関】

灘区「地域力を高める」事業、ひょうご環境保全創造活動、コープこうべ環境基金、コベルコ自然環境保全基金



テーマ：都市環境と六甲山



第22回市民セミナーの流れ

市民セミナー

1. あいさつ : 13:00~13:10
2. 講演 : 13:10~14:50
3. 質疑応答 : 14:50~15:10
4. 懇談 : 15:10~15:30

講演

- ①都市と自然から見る六甲山
- ②郊外居住と自然から見る六甲山
- ③地球環境時代から見る六甲山



神戸市街地と六甲山を境する諏訪山断層 (出典1))

講演のあいさつ(澤木 昌典さん)

私の専門は都市環境デザイン学で、都市計画やまちづくり等、人間にとって何が快適か、いい街にするにはどうすればいいかを探求しています。

都市や都市空間、地域のあり方を考える中で、環境・自然・人の調和(共生)という視点に立ち、研究・教育に取り組んでいます。

今日は、都市との関わりの中での六甲山の話、地球環境的視野も広げながらお話ししたいと思います。



澤木 昌典さん

講演内容

1. 都市と自然という観点から六甲山を見る

■阪神大震災を振り返る

今年で震災10周年。震災当日に六甲山の中腹から見た景色や御影周辺の様子など、澤木さんが撮られた写真で当時を振り返った。そして、地震が起こる断層について説明を聞いた。兵庫県地震を引き起こした断層は、逆断層で横ずれ断層であった。

地震の起きるメカニズム

正断層	横に引っ張られて起きる
逆断層と横ずれ断層	両方から圧縮されて起きる

■200万年前の六甲山地はなだらかな丘陵地

たくさんの断層がある六甲山地は、約200万年前、高い山ではなくなだらかな丘陵地であった。

約100万年前から活断層は大きく崩れ動き、六甲山地を上昇、大阪湾を沈降させた。約50万年前になると、上昇した六甲山地は河川によって激しく浸食された。その後、後退して阪神間に扇状地が形成され、その扇状地も活断層によって持ち上げられ、台地になった。

六甲山の段丘面には、大阪湾の海底にある地層と同じ年代のものが、相当多くの大震災の繰り返しにより形成された。



100万年前の六甲山地周辺(出典1))

2. 郊外居住と自然という観点から六甲山を見る

■居住地として恵まれた資質をもつ阪神間

都市に住むということから六甲山を見てみると、郊外居住の歴史はたかだか100年位である。阪神間や神戸は住宅地として非常に発達しており、日本全国から見ても先端の地域であった。

<阪神間の恵まれた条件>

- ・南向きの斜面(六甲山を背山)
- ・日当たりよし(瀬戸内式気候)
- ・明るい(真砂土=六甲山の風化花崗岩から)
- ・海と山という自然が接近
- ・空気がきれい
- ・大阪に近い(神戸にも近い)

もとは都市の中に住んで、自分の家やすぐそばに働く場所があった。明治半ば以降、農村から都市へたくさんの方が集まってきた。都市の居住環境の悪化と同時期に鉄道が発達し、郊外に交通機関が整備された。海外からの影響もあり、郊外に住むことが憧れの文化生活となり、明治の後半から急速に広まっていった。

■阪神電鉄や阪急電鉄が宣伝

阪神電鉄は、大正初期に雑誌を発行し、郊外生活がいかに楽しいかを提示。六甲山がつくってきた阪神間のいい気候風土の中で、人間らしい健康的な生活をしていこうと呼びかけた。



阪神鉄道発行 月刊「郊外生活」→

■郊外住宅の事例

戦前、六甲山南山麓には、理想郷に近いような自然環境を活用した地域づくりがあった。

(芦屋・六麓荘)

イギリスの租借地をモデルにしている。自然の風致を損なわないように開発思想の中に六甲山の南斜面、松林を中心とする自然風致を残していこうとする意図が見られる。

(住吉村)

多くの富豪が大阪から阪神間に移り住んできた中で一番著名なのは住吉(昔の住吉村)である。旧住吉村の財産管理は、幼稚園や小学校、病院などをつくって、今も続いている。

3. 地球環境時代という観点から六甲山を見る

■環境問題の発生

20世紀後半から様々な環境問題が起き、90年代から地球環境問題が指摘された。従来の環境問題は害を出す発生源(加害者)がはっきりしているが、現在は誰が悪いと言えないような大きな問題が起きている。すぐには被害が出ず、被害は後世代に及ぶ。また、人間の生活を便利にするための化学物質が、人体に健康被害を及ぼすことも認識されてきた。

<20世紀後半から見る環境問題の移り変わり>

1960年代	産業公害	公害病
70年代	高速交通公害	空港、新幹線公害
80年代	生活公害	洗剤、ゴミ公害
90年代	地球環境問題	酸性雨・オゾン層
95年以降	化学物質問題	ダイオキシン他

■コンパクトシティ

先進国など環境負荷をかけてきた都市は、地球環境に負荷をかけない形の持続可能性のある都市をつくらうと考えている。そのひとつがヨーロッパで議論されている、コンパクトシティである。コンパクトシティは、分散した都市ではなく、密度の高い多様な機能を持って自動車に依存しない都市をつくっていくのが一つの流れ。ヨーロッパ、特に大陸の都市は、もともと都市を単位に自律的に発達してきたので、このような形の都市を考えている。

■ニュー・アーバニズム(アメリカ)

アメリカは、エネルギーの使用量、一人あたりの二酸化炭素排出量が世界で最も高い国である。新しい都市をつくる発想に、ニュー・アーバニズムがある。徒歩圏の規模で、住宅・商業・文化施設等の複合機能、周囲の自然環境や歴史的環境の保全、環境配慮などが考えられ、近隣周辺にグリーンベルト等の自然を残そうとしている。

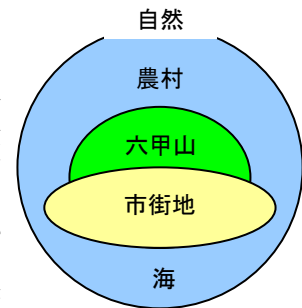
■神戸でもコンパクトタウンを構想

震災後、神戸市は、ヨーロッパのコンパクトシティのようなコンパクトという言葉を使った街を目指そうとしている。

わがまち意識を育てる地域のまとまりの中で、住民の日常生活がある程度可能で、そうしたコミュニティに自律性を持たせる。住民は自らの町のあり方を発想し、地域の自然や歴史、文化などの個性を大切にしまちづくりを自ら実践していくことによって、安全で安心して快適に暮らすことのできる生活圏を築いていく。安全・安心については、震災で人々のつながりが非常に大切なことに気づいた。このようなコンパクトな地域のまとまりの中で、自立したまちを神戸市内につくっていくという構想である。

澤木さんのまとめ

六甲山は、神戸市をはじめ山麓の都市から見ると、非常に貴重な場所になる。都市からの環境負荷を減らすことを前提としながら、コンパクトな生活圏の集まりから構成される市街地部分と周囲に豊かな自然環境を保全する、このような形が神戸市のあり方だと思う。



3つの大きな資源
都市(市街地)・農村・自然

六甲山と阪神間の都市は、まさにセットになっている。さらにその六甲山の背後(神戸市北区や西区など)には農村地域もあるので、都市と農村と六甲山の自然、この3つの大きな資源を包含した地域循環も築くことができるのではないかな。

(図出典): 1) 兵庫県立人と自然の博物館編
「兵庫県南部地震を考える」(1996.3)

◆参考・配布資料など:

- ・スライド(澤木さん持参)
- ・レジュメ

※現在『都市環境と六甲山』の講演記録を作成しています。ご希望の方は事務局までお申し出ください。



天候を気にしつつ記念撮影

◆参加者の感想 ~アンケートより~

- ・非常にわかりやすい講演であった。特に六甲山の成り立ちがよくわかった。
- ・人が快適に暮らすことだけを考えるのはあつかましいことだと感じた。
- ・銀世界の六甲山がとても新鮮だった。

◆事務局より

大雪の中での下山は大変でした。お車の方(小笠原さん、近藤さん、桑田さん)、便乗させていただきありがとうございました。

◆参加者: 23名(順不同・敬称略)

澤木 昌典 八木 浄 村上 定広 藤當 和子
北山健一郎 大谷安規永 新木 里志 高光 正明
小笠原康人 久保 紘一 田中 有司 中垣内 博
白岩 卓巳 久保 順一 近藤 佳里 柴田 正生
堂馬 英二 桑田 結 中川貴美子 小野 律子
藤井宏一郎 中野 一 菖蒲 美枝